

いつでも、どこでも、だれにでも

(コリント五・一七他)

個人的に続きが気になるCM。それが「プロミス」。「ハンサム」谷原章介扮する芸能事務所の社長が何とも「すばらしい！」のだ。しかし良く考えたと「いつでも」借りられて、「どこでも」返せるというのは恐怖だ。グレートゾーン金利が撤廃された今でも五〇万円を一年間借りると利息は何と五万円。コミカルで気軽なイメージに乗せられ、「いつでも」「どこでも」「ゼロ円」に乗せられては「すばらしい」「どこか」「おそろしい」である。

閑話休題。時々「お宅は代々キリスト教だったんですね」と聞かれることがあるが、クリスチャンとはそういう人ばかりではない。寧ろクリスチャンになることは「いつでも」「どこでも」「だれにでも」出来ることなのだ。以下三つのキーワードからキリスト教信仰の特徴について考えてみたい。

### 一、「いつでも」救われる

コリント六・二には「神は言われます。『わたしは、恵みの時にあなたに応

え、救いの日にあなたを助けた。』確かに、今は恵みの時、今は救いの日です」と書かれているのだが、二度に渡って書かれている「今」という語にその強調点があるのは明白だ。この個所の言う「今」とは第一義的にはこの手紙が書かれた紀元五七年ごろを指すのが、実際には今朝のこの瞬間も含まれていると考えてよい。なぜならここで強調されている「今」はイエスの十字架の死と復活が起こり、神が全人類に与えた救いの知らせが現実のものとなったという意味での「今」だからである。イエス・キリストが私たちの罪の為に死に、私たちを義とするためによみがえられてからこのかた、世界には「いつでも」救われるチャンスが用意されているのだ。

### 二、「どこでも」救われる

よく「なんで日本人なのに西洋の宗教を信じるのか」という質問をされる方がいる。確かに「キリスト教」の発信するイメージには美しい西洋建築、壮麗なパイプオルガン、ウエディングドレスに讃美歌といったものがあるのは否めない。また来日した宣教師の多数が西洋人だったことも厳然たる事実である。しかしだからと言ってキリスト教を西洋の民族的な宗教と考えるのは間違っている。なぜならイエスご自身は「全世界に出て行って福音を宣べ伝えよ」

と命じ、人々はその福音を聞いたその場所で救われたからである。更にいえば今やキリスト教の成長点はアジアやアフリカに移っている。そう考えるとキリストの救いに地理的限定なるものは全くない。イエスの福音を聞き、信仰を言い表すなら、病院であれ、仕事場であれ、レストランであれ、はたまた刑務所の便座の上であれ、どこにしようとも人は救われるのである。

### 三、「だれでも」救われる

同じく「わたしのよう人間は信心が足りませんから、教会なんてとてもとても」とおっしゃる方もいる。しかし敢えて言えばこれは不要な気遣いである。というのもイエスは「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい」(マタイ一・二八)と言われたからである。一体この世のどこに疲れない人、重荷のない人がいるだろう。そう見えない人や、見せようとしたくない人、あるいは今それを感じていない人はいるかもしれない。しかし仏陀が四苦(生・病・老・死)を説いたように、人生には苦勞が付きもの。イエスはその苦勞している人間すべてに向かって呼びかけたのである。またコリント五・一七には「だれでもキリストの内にあるなら、その人は新しく造られた者です」とある。ここにも「だれでも」がある。

福音はあなたの過去を問うことはない。そのままのあなたで、素直にキリストの招きに従い、キリストの中に入れられるならばその瞬間から新しい創造が始まるのである。

\* \* \*

昨年末百三歳の老人が師走の日本を駆け抜けた。東京の自宅から西宮を新幹線でとんぼ返りしたという。青年もかくやと思わせる弾丸講演旅行についた「いいね！」はなんと一一六四。日野原重明先生は相変わらずのご活躍ぶりである。そんな日野原先生の名言に「鳥は飛び方を変えることはできない。しかし人間はいつからでも生き方を変えられる。良い生き方は楽しい明日をもたらししてくれる」というのがある。その若々しさに驚愕すると共に、彼にこう言わせるバックボーンはどこにあるのかと考えるとやはり彼のキリスト教信仰にたどり着く。彼はこう言っている。「よい生き方を聴くためには目を覚ましていることが大切であり、なによりもイエス・キリストに聴くことが大切だ」。友よ、イエス・キリストは今日も「私のところに来なさい」と招いておられ、その招きは「いつでも」「どこでも」「あなたにも」だ。今からでも遅くはない。イエスを信じ、新しい創造を体験しようではないか。